

木田市長の



vol.52

ある小説家の来訪

1月7日、小説家の大門剛明（たけあき）氏が市長室を訪れてくれました。

大門氏は35歳、伊勢市出身で、小説第1作「雪冤（せつえん）」で横溝正史ミステリ大賞を受賞した新進作家です。わたしが今回、この訪問のことをコラムに書きたいと思った理由は二つあります。

一つは、大門氏が小説を書き始めたきっかけです。新聞記事によると、「派遣社員をしていて、このままでは日の目を見ないだろうと感じて、小説を書くことにした」という一件です。

そんなに簡単に小説なんて書けるものなのか：小説家になるためには、特殊な才能が必要と考えていたわたしには

少々驚きでした。

「雪冤」を読んで感じたことは、そのストーリーや内容がなかなか面白いことや法律など専門知識がかなり豊富なことで、大門氏が豊かな才能を有していて、しかも調査研究も熱心にされていることは間違いないということでした。やはり誰にでも小説が書けるわけではないと改めて思いました。

同時に考えさせられたのは、大門氏のように有能な人でもチャンスに恵まれず、いったん、派遣社員や臨時雇いとなると、そこから這い上がって、いわゆる、日の目を見るのは難しいということでした。大門氏には、その苦境を乗り越えて立ち上がるだけの

強い意思があったのでしよう。

二つ目には、大門氏の第2作「罪火」というミステリー小説は、舞台が伊勢市や鳥羽市となっており、佐田浜や答志島が出てくる上に、寝屋子制度やじんじろ車まで登場してくるのです。

「まるで犬歯みたい」窓の外を見ると、そこには鋭い岩が海面から突き出ていた：

確かに、答志港のすぐそばにそんな岩があったなあと思いがけられました。感性鋭い小説家が観察した、わたしたちに身近な風景などを思いながら推理小説を読むのもまた一興ではないでしょうか。

「罪火」の出来は第1作以上という自信があるとご本人が言っていました。よかつたら読んでいただきたいと思えます。

大門氏は、今多くの若者が悩んでいる就職の問題を自らの努力で打破する先例を示してくれました。みんなに驚きとともに勇気を与えてくれました。

彼が押しも押されもしない実力ある小説家に成長されることを心より願っています。

人権文化の花を咲かせよう

Vol.91

事実↓学び↓実践

昨年の11月28日・29日に「差別の現実から深く学び、生活を高め、未来を保障する教育を確立しよう」というテーマの下、第61回全国人権・同和教育研究大会が四日市市を中心に開催されました。

四日市ドームで開かれた全体会には、全国各地から約1万人もの参加がありました。

基調提案の中で、人権教育の豊かな内容を創造していくための視点として、

- (1) 部落のこどもをはじめとする厳しい立場にいるこどもの教育課題の取り組み
- (2) 教育の機会均等の取り組み
- (3) 部落問題学習をはじめとする

- る教育内容創造の取り組み
- (4) なかまづくりの取り組み
- (5) 進路保障の取り組み
- (6) 人権のまちづくりをわたしたちの手で

① 社会教育における同和教育を基軸とする人権教育の取り組み
② 地域コミュニティを展望して
という6つの視点が提案されました。

さらに、「こども一人ひとりが、どんな暮らしの中でどのように育ってきたのか、そして、どんな思いで学校に来ているのか、親や身近な人たちの願いは何なのかという事実」に学び、そこから教育を創り出そうとすることを、わたしたちは何よりも大切にしてきました。こうした『子どもの事実から出発すること』『差別の現実から深く学ぶこと』は、同和教育だけでなく、すべての教育に普遍化されるべきものです」との提案もなされました。

事実から出発し、現実から深く学んだことを「実践」としてはならないと思います。